

主なき蜘蛛の巢の先降り月

令和二年 仲山 富夫

春の蟬お入らず山の祝詞かな

白牡丹老母の如く静かなり

蟬時雨川ゆるやかに蛇行せり

山寺の鐘の音遠き山紫陽花

太古より来たりて鳴くや百千鳥
狛寅の毘沙門堂や麦嵐

皐月晴れ棚田の光いや増せり

初しぐれ華厳の滝音いやまさり

五月晴山は大きくなりにつけり
客待つや盥の西瓜の静かなり

秋の日や湖底の寺の謂れあり

裏作の玉葱辛き茅の屋根

竹の秋古戦場に我影を追ふ

晩秋や雨音深き萱の屋根

移ろいは曼殊沙華の真中なり

雉鳴いて飛行機雲の流れ行き

木の葉散り夕べの鐘の届くなり

冬の路下り切るまで無縁坂

フと見やる犬の鼻先蜘蛛流る

鳥を待つてつぺんの柿取り残し

阿羅漢の袈裟も重たき寒の雨

母の歩に合わせて行けり秋祭り

賄の馬鈴薯一つ影長し

落椿十重に二十重の恨みかな

父母の声山より出てて姿なし

秋の日や父逝くときの指太し

初七日や鬼灯の花の薄白し

蟬時雨母の棺を送りけり

秋の陽や影絵つくりて一人っ子

山彦や帰り来る音も晩秋ぞ

大根の太きも細きもくの字なり

身延路の曙大豆を脱穀す

風光る本卦還りのおこわめし

亀の子や小雨の空を見上げおり